

人間学研究所2009年度公開シンポジウム

日時：2009年5月30日（土）13時～16時

会場：五條会館（五條楽園歌舞練場）

「鬼の踊りから祈りの踊りへ 大道芸人・ギリヤーク尼ヶ崎 40年の軌跡」

講師：ギリヤーク尼ヶ崎（大道芸人）
司会・聞き手：鵜飼 正樹（京都文教大学人間学研究所所長）



図1 公開シンポジウムのチラシ

鵜飼：京都文教大学人間学研究所の鵜飼です。
今日は暑い中、大道芸人・ギリヤーク尼ヶ崎さんの公開シンポジウムにお越しいただきましてありがとうございます。ギリヤーク尼ヶ崎さんは、1930年8月のお生まれということですから、今年（2009年）で79歳になられます。日本の大道芸の草分けといってもいい方



図2 会場風景（写真の展示）

で、1968年10月、東京の数寄屋橋公園で、はじめて青空舞踊、大道芸として野外で踊られました。それからちょうど、去年の10月で40周年でした。現在も40周年中ということで、このたび、わざわざ東京からお越しいただき、お話をうかがうことになりました。

40周年を記念して制作された『平和の踊り』というDVDも、今年の4月に完成しました。2枚組で、全編で3時間近く、ギリヤーク尼ヶ崎さんの生い立ちから現在までをまとめた作品です。会場でも販売していますので、ご関心をお持ちになった方は、お買い求め下さい。今日は第1部として、そのDVDをこちらで30分程度に編集したものを、まず皆さんにご鑑賞いただいて、ギリヤーク尼ヶ崎さんの芸と人物について理解していただくことに

したいと思います。引き続きまして、ギリヤークさんと私とで、対談と言いますか、私がギリヤークさんのお話の聞き手をさせていただくのを、第2部といたします。それから第3部として、ギリヤークさんのご好意によりまして、今日は実際にこの舞台で踊りを踊っていただけることになりました。

すでにご存知の方もありますが、ギリヤークさんは、去年の12月に心臓の手術を受けられ、ペースメーカーを埋め込まれました。例年、ゴールデンウィークは、尼崎、大阪、京都、神戸など、関西を公演して回られます。けれども、今年の初め、私が上京して、大道舞踊40周年を記念して、ぜひ京都でお話いただけないでしょうかとご相談にあがった時には、手術をした直後だったということもあって、春の関西公演が予定通りできるかどうか、ご心配されていました。しかし、その関西公演も、無事終えられまして、今日お越しくださったわけです。

私がギリヤークさんの踊りを初めて見たのは、昭和から平成に変わる頃ですから、もう20年以上前のことになります。その後、毎年見てきたわけではないのですが、ほぼここ10年あまりは、ゴールデンウィークに関西で公演される時には、大阪のアメリカ村であったり、京都の円山公園であったり、どこかでず

っと継続して拝見しています。芸事に興味を持つものとして、私も、40年前にたった1人で路上に出て踊られた頃から今日まで、大道芸人として踊り続けてこられたギリヤークさんからどんなお話がうかがえるのか、楽しみにしております。

ギリヤークさんには、『鬼の踊り』という著書¹があります。1980年に出たもので、タイトルの「鬼の踊り」は今日のお話のキーワードのひとつになるかと思います。現物を探してみたんですが、すでに絶版で、ネットオークションでは法外なくらい高額になっていて、入札をあきらめました（笑）。ですので、私はコピーでしか持っていないのですが、この本には、それまでのギリヤークさんの経験が書かれています。今日は、その後のお話も合わせて、といっても1980年から30年近くたちますけれど、お聞きできたらなあと思っております。

それでは、長話は時間のさまたげですので、さっそく、今年4月に完成したDVD『平和の踊り』を上映したいと思います。この会場は、冷房が効いておりません。暑くて申しわけありませんが、みなさんが外で大道芸をご覧になる時も、やはり天候にそのまま左右されるような環境です。ご了解、ご辛抱いただいて、しばらくの間おつきあい下さい。

第1部＜DVD『平和の踊り』ダイジェスト版上映＞

鵜飼：どうもありがとうございました。『平和の踊り』は3時間以上あるDVDなんですが、ニューヨークのグラウンド・ゼロから始まり、ギリヤーク尼ヶ崎という大道芸人の生い立ちや活動を追って今日まで、最後にまたニューヨークに戻ってという、この30分のダイジェスト版は、京都文教大学の卒業生、木越薫さんがまとめてくださいました。引き続き、ギリヤーク尼ヶ崎さんのお話をうかがいたいと思います。ギリヤークさん、どうぞ。

＜ギリヤーク尼ヶ崎さん登場。拍手＞



図3 『鬼の踊り』表紙



図4 シンポジウム会場風景

函館に生まれ育つ

鵜飼：それでは、みなさんを代表して私がうかがいますので、ギリヤークさんの踊りの本質や、「鬼の踊りから祈りの踊りへ」という今日のテーマを中心に、お話いただけたらと思います。さっそくですけれども、ギリヤークさんは、DVDにもありましたように、お生まれは北海道の函館なんですね。

ギリヤーク尼ヶ崎（以下ギリヤーク）：はい。

鵜飼：お菓子、和菓子を作っていたらした、大きなお家にお生まれになったと²。

ギリヤーク：本当はね、注文がありますから、何でも作っていたんです。今でいうようなケーキというか、洋菓子は、ちょっと北海道はあまり向かないから、寒いところですからね。主に和菓子、駄菓子というか、そういうのを作っていました。

鵜飼：函館の街中になるんですか。

ギリヤーク：ええ、そうですね。昭和20年の第2次大戦が終わった頃は、甘いものをみんなほしがっていたでしょう。だから本当に簡単な。京都なんかは立派なお菓子たくさんあるでしょう。でも、あんものっていうか、中にあんこの入ったお菓子は作っていましたからね。懐かしいですね。京都へ来ると、やっぱり洋菓子じゃなくて和菓子を私もけっこう買って食べますけど。使用人が60人ぐらいいて、函館に売店が4つか5つくらいあったんです。で、私は次男坊でしたのでね、お菓子を作るのが上手だったんですよ。工場へ出て、職人

さんの真似をしてね。でもあれ難しいんですよ。皮が手にくっついちゃうんですよ。それをこうやって（菓子を作る手つき）、1個つむのね。職人さん、やっぱり腕はすごかったですね。

芝居・活動写真・器械体操

鵜飼：先ほど立ち話でお聞きしましたが、子どものころからよく、おばあさんと一緒に、函館に来ていたお芝居をご覧になったとか？

ギリヤーク：活動写真と昔は言っていましたね、映画。それから芝居ですね。私、街頭で踊ってきて、こういうところでこういうふうにお話するのは初めてなんですよね。勝手が違っててちょっとオドオドしている反面、懐かしいなっていうのは、だいたいもっと小さい芝居小屋で、東京から来た役者さんですか、それをおばあさんと一緒に行っては見ましたからね。懐かしいです、この（五條会館の）雰囲気が。

鵜飼：ご覧になったお芝居は、歌舞伎ですか。

ギリヤーク：要するに、本物の東京の歌舞伎座じゃなくて、あれと似たようなことをやる劇団みたいなのがけっこうあるんですね。本物のあれはね、とてもとても函館でなんか見られなかったですけどね。

鵜飼：活動写真というか、映画もよくご覧になった。

ギリヤーク：ええ。私はね、小さい時からお菓子屋さんで育ったんですけど、昭和20年の時に、もうその前からですけど、私ちょうど、旧制中学³の3年生の時に戦争が終わったんですよ。で、小学校の頃から、器械体操をやっていたんですね。鉄棒で車輪やったり、ああいうのをやっていたね。とにかく大きくなったら、中学校の体育の先生になりたいなと思ってたところが、昭和21年の第1回国体というのが大阪と京都のほうだかであったんですよ⁴。天皇陛下迎えて。それ私、北海道の器械体操（代表）の3人のうちの1人に入ったんです。ただし、函館へ帰ってきましたら、猛練習したりして、胃下垂という病気になって、ずいぶん痩せていったんです。その頃結

核だと思って病院の先生見てくださるけど、何ともないと言って。でも胃下垂でも結構重いほうでね、結局旧制中学を5年で中退しましたね。

鶴飼：旧制中学は5年制ですから、ちょうど卒業寸前ですね。

ギリヤーク：ええ、そうなんです。ちょっと悔しかったんですけどね。それで、うちの商売を手伝ってたんですよ。そうすると、忙しいからね、（名前が）勝見っていうんですけど、「勝見ちゃん、何々映画館にお菓子を配達してください」って言われて、行ってるうちに、映画館に行くと、売店では「兄さん、映画見て行きなさい」と言って。主に松竹映画の映画館の売店だったんですよ。それで行くうちに、だんだん映画に惹かれて。その頃人気のあった俳優さんっていうのはね、鶴田浩二さんと、三國連太郎さん。今でも、三國連太郎さんね、テレビでコマーシャルとか出たり、ドラマに出るとね、自分の子どもの頃を思い出して、青春というか、懐かしいです。

映画俳優にあこがれて上京する

ギリヤーク：今でも私ね、私の思いなんですけど、日本で一番キレイな女優さん⁵。それはね、私、本物見たんですけどね。東京で昭和26年



図5 当時のプロマイド
(ギリヤークさん所蔵)

に。あの、映画俳優になりたいくて、うちのお父さんとかお母さんに、そういつては許可は下さらないので、「英語の通訳になる」と言ってうちを出て（笑）⁶。

鶴飼：東京に行った（笑）。

ギリヤーク：それで、その頃、だいたい、5年間、毎月2万円ずつ仕送りしてもらってたんですよ⁷。そして、ニューフェイスっていうんですか。そういうのに応募しましたけどね。私、北海道生まれなんですよ。それでちょっと訛りがあるんですよ。で、たいてい朗読するんですね、書類審査で通ると。撮影所に行つて。そうすると、映画で見ると、俳優さんとか監督さんとかがいるでしょう。すっかりあがっちゃったのとね、朗読で「雨が降る」ってありますよね。それ、北海道では、「アメ」って言わないんですよ。「アメ」なんです。す。「アメ」がふる。食べるあれも「アメ」なんです（「雨」と「飴」でイントネーションが同じ）。その前後の言葉でどっちかに判断するんですけど、まず朗読で落とされましたね。それから、俳優座とか民芸とかあったんですね、新劇。それもやっぱり、まず朗読で、落ちました。残念でしたけどね。

それと前後しましたが、旧制中学の時にね、器械体操の、北海道の3人のうちの1人に入ったもので、今思い出すと、もし体操の先生になってたら、私こんな大道芸なんかやっていなかったらうなあと。で、胃下垂という病気になってね、うちの手伝いをするようになって、そうして映画館の売店にお菓子を卸して、帰りは映画を見て帰ってくると、やっぱりあこがれでした。

鶴飼：そうですか。映画俳優にあこがれて東京に行った。

ギリヤーク：それから東京に出てから、新劇の研究所にも行ったんですけどね、映画の撮影所と新劇の研究所では雰囲気は違うんですよ。新劇のところに行くとかだいたい、その頃そこにいる先生方とかは、だいたい、あれは左の方。左翼っていうか、そっちの方なんかで、メーデーになるとね、東京の上野公園とか原宿とかに、みんな出かけるでしょう。私が泊

めてもらっていた下宿のおばさんがね、「これ、左の演劇の学校だから出ていってください」って。そんなことがありましたからね。私はちゃんと立派な俳優さんになるあれはなかったんで、とにかく映画俳優にあこがれてずうっときたんです。その気持ちは今でもあるんですけど、それでいいんだと思ってましたよ。

鵜飼：さっきおっしゃられかけた日本一美しい女優という話はどうですか（笑）。

ギリヤーク：うちのお菓子屋の方もね、結局は昭和30年頃ですか、つぶれちゃったんですよ。あと、うちのおばあさん、それから妹、兄さんと亡くなってね。弟2人と私と、母と残って、秋田の大館というところへ行って、そこで、「ホームラン焼き」って、ボールのホームランの形した、中にあんこの入っている、たい焼きの形がホームランになっているの。それが結構売れたんです。その頃っていうのはちょうど昭和30何年頃で、巨人に長嶋選手が入ってきた頃⁸で、すごく、合っていた。でもそのあと、他の業者もみんな真似するようになって、売れなくなってきた、それからまた東京へは、昭和35年に出了ました⁹。

邦正美舞踊研究所

ギリヤーク：結局、撮影所まわりとかしても、なかなかニューフェースで入れない。新劇行っても朗読するとまずはねられる。それで考えたのはね、どうも芝居とか、役者よりも、体を動かす方が向いているんでないかと。それでバレエの研究所に行つてね。あれ大変です。バーにつかまって足を上げてやるのもね、もう二十歳過ぎてからですと、体がかたいんですね。それで向かない。そうしましたらね、昭和27年頃でしたかね、ドイツ帰りの舞踊家で、邦正美という先生¹⁰がいて、その人は日本の古典バレエでもない、もちろん日本舞踊でもない。普通の洋舞でもない。要するに自分で創作して自分で踊るっていうんです。絵描きさんが自分で絵を描いて発表会をしますよね。それから小説家は自分で文章書いて発表する。「そうだ、僕のできそうなのはこ

れだな」と。私、誰かが振り付けしてくれたり、そういう踊りはね、全然できない（笑）。だから自分で創作の勉強を、邦正美舞踊研究所に3年間行って、勉強して、あとは自分で振付けて、自分で踊ったら、一生主役で踊れるんでないかと。その発想。

鵜飼：へえーっ（笑）。

ギリヤーク：だからもし、邦正美先生が日本に帰ってこなかったら、僕舞踊家にもなれなかったかもしれないですね。

鵜飼：邦正美先生は、レジュメでも少し説明していますが、100歳近くまで生きられて、つい先年お亡くなりになった、有名な創作舞踊家ですね。その研究所では、どんな勉強をされたんですか。

ギリヤーク：舞踊の研究所に行つて困ったのは、やっぱり舞踊の先生というのは、すぐ自分で動いてみて、「この通りに動いてごらん」とかやる。それが私ね、できないんですよ。舞踊の研究所は、ほとんど女の方、ほとんど先輩です。男の人っていうと私だけなんです。稽古着を着て、まじつてね、たとえばこうやって、それからこうやって、1・2・3・4・5・6……（舞踊の動きをじっさいにやってみせる）。

鵜飼：おおーっ。

ギリヤーク：こういう動きでやる。それから自分で工夫して動く。自分の体が動くように。絵描きさんがね、これは「ギリヤーク・ウォーク」だと（会場笑い）。要するに創作舞踊だから、先生を見ながら作り方を習うと、その先生の「型」でずっといくんですよ。だから舞踊界でね、私はじめてデビューした時にね、昭和33年頃ですか、そのとき、バレエも古典バレエも、洋舞も、全部一緒だった一つの団体に属していたんです。そのときにやっぱり、私の動きを見ると、他の舞踊の先生方は分かるんですね。ああ、これは「邦正美系」だと。どこを見てだか、こうやって、皆さん先生の名前を、邦何々だとか、花柳何々だと。それもあんまり好きでなかったのね。そこで私は3年間だけ基本を勉強して、創作の仕方はほとんど習わないでね、結局邦先生

のところも中退して、あとは自分でやりました。

鵜飼：先ほどのDVDにもありましたが、コンクールで発表されて新聞記事になった「芸人」などの作品¹¹も、その頃に自分で創作されたんですか。

ギリヤーク：邦先生からは創作の仕方は何も教わらないで体の鍛え方だけ、基本訓練だけ、いわゆる古典バレエだとバーにつかまってやる、あれだけ習って、実際の踊りは習わなかったからこそね、自分の「じょんがら（一代）」だとか、ああいうのが出来てきたんだと思います。やっぱり邦先生のところで邦系の振り付けを習うとね、もうそういう先生の踊りになってしまう。だから先生以上には出られないんですよ。先生の創作したものを学んでいくっていうか。

だから、「じょんがら」も最初踊った時に大変でしたよ。顔だけ動かすので、自分でも踊りなのか不安でした。津軽三味線の音楽を聞くと、自然に体が動いてきて、奇妙なああいう踊りになったんですけど、大学祭で踊った時にね、「じょんがら」が受けたんです。そのときはまだバチさばきもなく、ゴザの上にただ座ってテープレコーダーかけて踊ってこうやって（首を振り、目をしばたかせるしぐさ）いたらね、学生さんがおもしろいって言うてくれて。

鵜飼：へえ、そうだったんですか。

近藤正臣さんとの交流

ギリヤーク：「じょんがら一代」って三味線もって踊るのは、3年かかりました、振り付けるのに。衣装なんかはね、やっぱり動きができてから、絵描きさんのところに行ったら、赤い袴袴、それから腰紐、白い袖なしなんかも自分で考えて、菅笠もね。私京都に来て踊ったのが、昭和45年か46年頃なんですけど、三条大橋のたもととのところで。

鵜飼：さっきのDVDにありましたね。

ギリヤーク：あれを教えてくださいましたのがね、俳優の近藤正臣¹²さんです。東京で歩行者天国ができた昭和44、5年頃でしたか。美濃部

さんという知事さん¹³が、新宿の歩行者天国を開放したのでね、そこで踊った時に、たくさんお巡りさんが来て捕まって連行されて大変でしたよ。重要犯罪人みたいなね。「歩行者天国だから、天国で自由だよ」って、絵描きさんが僕をけしかけたわけ（笑）。そのちょっと前に俳優の近藤正臣さんと知り合ったんです。ある画廊で絵描きさんに頼まれて踊ったらね、私が踊っている写真を持ってきて、「すみません、サインしてください」といった人がね、よく見たら俳優の近藤正臣さんだった。

鵜飼：へえ。

ギリヤーク：近藤正臣さんと桜木健一さんが、ちょうど『柔道一直線』¹⁴というテレビに出る時だから。僕のお母さんも近藤さんのファンだからね。お互いにサインをしようって。そうして知り合ったら、「僕、今度新宿で、歩行者天国で踊るんだ」って、言ったんですね。そしたらちゃんと来てくださって。サングラスをかけて、一般の人にはちょっとわからない変装してましたけどね。警官が出てきた時ね、「表現の自由じゃないか」と。近藤さんが警官に食ってかかったからね、近藤さんなかなかやるなあ、芯が強いなあって。私連行されたあと外で待っていてくれて。そのときに取り調べの中でね、フンドシ1本で踊ったんで、もうさんざんお巡りさんに怒られましたけどね。「お祭りとか御輿担ぎの時はみんなフンドシになんですけど」って言うと、「あれは君ね、神聖な行事なんだ。あれはいんだ。君は1人だからダメだ」と言うので、とにかくここは謝って釈放されたほうがいい、「はいわかりました、もう二度としません」と。で、近藤さん外で待っていてくれて、食事に誘ってくださってね。

そのときに近藤さんがね、「京都で踊るなら三条大橋がおもしろいよ」と。「あそこは絶対捕まらない」。その頃の蜷川知事さん¹⁵という方が、ここは大道芸人の場所と決めていた。そんなすごいところがあるのっていうので、さっそく夏の、大文字の日¹⁶にね、踊ったんです。それが昭和45年か、46年、8月16

日。

鵜飼：高山彦九郎の土下座をしている銅像¹⁶のあたりですね。

ギリヤーク：ええ、向かいに高山彦九郎の像があつてね。

鵜飼：はい。

ギリヤーク：歩道橋があつて、ネコの額ほどの狭いところがびっしり、いっぱいになって。感心したのはね、東京では踊ってもカンパ入らないんですよ。ところがね、京都はスゴイと思ったのは、4000円か5000円入ったんです。フンドシ1本で踊ったんです。ほとんど今は踊らない「念力」って踊りなんです。それで踊ってもね、京都の人は目の色を変えないでね、見て、カンパしてくれて。いいもの見してもらいましたと。そんなときはピエロの「芸人」っていうのと、「白鳥の湖」。そして「じょんがら」がまだできてなかったんです。それで3つ目かフンドシ1本で踊って、交通整理していたお巡りさんもね、注意に来なかったんですね。お巡りさんまでやっぱり文化的ですね（会場笑い）。助かりました。

角兵衛獅子の思い出

鵜飼：少しお話がさかのぼりますけれど、初めて街頭で踊られたのが昭和43年ですね。そのときにはもう38歳ですよ。それまでは、舞台で創作舞踊をやっていたかと思われていたんですか。

ギリヤーク：ええ、全日本芸術舞踊家協会¹⁷。その会員だったわけ。それを見ていてどうも肌に合わなくてね。

なぜ街頭に出るきっかけができたのかと言うと、昭和10年頃だから、数えて6つくらいの時に函館の私のお菓子屋の家の前でね、角兵衛獅子の大道芸¹⁸っていうのを見たんです。もしこれ見ていなかったら、私、今日ないです。子どもさん2人がね、そんなたいした芸じゃない。アクロバットみたいに、逆立ちしたりね、その程度。で親方って人がいてね、太鼓持って。で逆立ちしたり、それでお金もらうんじゃなくてね、それは人を集めるための、見せる芸なんです。そしてどうするかっ



図6 角兵衛獅子（阿久根巖『逆立ちする子供たち』小学館、口絵20より）

ていうと、親方が細工した飴が何かを売る。その頃だから、1銭ですか。いまだと100円くらいでしょうかねえ。みんな子どもさんが飴を買うわけ。だから芸はただで見るの。日本の大道芸ってわりと、がまの油売りもバナナの叩き売りも、ものを売る芸なんですよ。品物を売るための芸をやる。ところがパリとかニューヨークにいくと、逆立ちしたり、口から火を吹いたり、あれでお金をいただいている。そこがちょっと日本の大道芸と違いますね。

鵜飼：逆立ちして踊っていた角兵衛獅子の子どもは、ギリヤークさんとだいたい同い年くらいでしたか。

ギリヤーク：角兵衛獅子を6つくらいの時に見てね、それから東京に出てきてね、ずうっと忘れていたわけ。その角兵衛獅子の親子を。だって5つか6つのことでしょう。

鵜飼：そうですね。

ギリヤーク：それで舞踊界に入ってみただけね。いろいろな派があります。研究所の中にも先輩後輩もあるでしょう。何かあんまり自分の自由にいかない。ひとつは私ね、誰かのほかの人が振り付けしてくれた踊りは踊れないん

です、どういうわけか。先生が振り付けて、研究生が覚える。それをみんな覚えて発表会をやるわけでしょう。そういうのが下手なのでね。でも絵描きさんは自分の描きたいものを自分で書くでしょう。小説家も自分の文章で書くでしょう。だから3年間いてね、体を鍛えることだけ学んだんですね。あと1人になったからいいことにはね、やはり邦正美先生のあれ（影響）がないんですよ。かえってよかった。あるとかえって、今のような「じょんがら」は踊れなかった。創作の仕方習わなかったね、作るのは自由だろうと思って。

鵜飼：でも、どうして「じょんがら」だったんですか？

ギリヤーク：津軽三味線の踊りになったのはね、子どものころ、青森の津軽三味線の人があるんです。こういう小屋でやると、「勝見ちゃんあれが名人だよ」とうちのお父さんが言ってね¹⁹。その人の津軽三味線の弾き方が結構速いんです。だから今私使っているじょんがらは、速い方です。最近亡くなったんですけど、眼の不自由な方で、高橋竹山さん。この人も名人。本当に哀愁、哀感のあるね。でもその前に流行った、テンポの速い方で覚えたのが、私には合ってますね。

初めての青空舞踊公演

鵜飼：38歳というのは、もう若くないですよ。街頭で踊るのには、勇気がいったと思うのですが、どうですか。

ギリヤーク：ええ、たいへん勇気がいりました。舞台でもね、発表会はお金かかるとして。小屋を借りて、照明さん頼んでということになると。発表会なんてできない。お弟子さんもないから人が集まらないでしょう。それで困って困って、昭和43年の10月の26日頃、初めて街頭に出たんです。8月、9月頃ね、ひょっと浮かんたんですよ。どうやって自分のつくった踊りで食べていこうかと。舞台ではとっても続けられない。そこで子どもの頃見た親子の角兵衛獅子の、大道芸の人たちを思い出したわけ。何十年かしてから。「あ、これだ」。私も街頭で踊って、投げ銭をもら

って、うちのお母さんを養っていこうと。

そしてある絵描きさんにね、ちょうど踊る1週間前に相談したんですよ。僕はあくまでもそのときの気持ちはね、舞踊家は普通舞台で発表会をやるのを、街頭で僕は発表するという頭があったから、「青空舞踊公演」²⁰だと。大

道芸人と思ってなかったんでね。でも絵描きさんが「それは大道芸人だなあ」って。あなるほど、そういわれてみればそうかなあと。鵜飼：初めて街頭で踊られたのは、銀座の数寄屋橋公園で……。

ギリヤーク：で、舞台で経験したことはふっとびました。本当の街頭に行って。10月の26日の。僕の前には右翼の人が演説をやった。左の方はね、そのころちょうど東大の安田講堂が燃えてて、新宿なんかで学生運動やってヘルメットかぶっているような人がね、銀座にも来てビラを配っているわけ。私、その間に入ってね、やるの大変だった。交番に行つて、「覆面した学生さん方、あれは許可とってやってるんですか。あちこち汚しているけど」って言ったらね、「許可とっていない」と。「じゃあ僕舞踊家なんですけど、15分ばかり踊りたいんです。汚したりなんかしませんから」とお巡りさんに言ったら、「何なの」。創作舞踊だったってわかんないだろうから「パントマイム」ってとっさに言ったら、お巡りさんはその言葉だけは知ってましたね。「そうか」。「15分で済みます。左の方で覆面被っている学生さんみたいに汚したりしませんから、お願いしまーす」って言って。そ

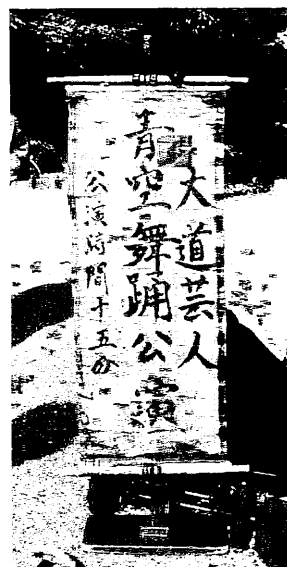


図7 ギリヤークさんが使用する掛け軸状の看板

こまではよかったけど、もう衣装に着替えて、メイクし始めたらね、あっという間に、200人以上来てね。ずいぶん若い人が来ましたね。で私を人間と思っていない。どこか天体のね、火星からでも来たような感じで、眼が輝いている。

鵜飼：はい（笑）。

ギリヤーク：見てくださっているね。今でもあの時の、昭和43年頃の日本人のね、東京の、ある意味で本当に、いい意味で好奇心があった。いい顔をしていたの。今そういう表情じゃないです。若者も、寝間着みたいなもの着てるでしょう、あれ。

鵜飼：ジャージですか。

ギリヤーク：あんなので悠然としてね。サラリーマンの人、昭和43年頃は、一生懸命働いている感じで、本当に皆さんいい顔をしていたの。それがね、今変わりましたね。寂しいっていうか、経済的に豊かになってきて、だけど何でもテレビを見たり本物を見に行けるけど、本当に豊かなのかなあと。

絵描きさんがね、「たぶんカンパは200円くらいしか入らないだろう」と。ああ、踊りはね、「芸人」というのと「白鳥の湖」と、それと即興で踊って。そして、竹筒を置いたんですよ。「喜捨箱」って書いて。ポストみたく赤く塗って、目立つところに置いたらね、踊り終わった時、あれでしたよ。踊り終わったら誰も入れないのかなあとと思ったら、チャリンチャリンと、音がしたんですよ。そのときね、嬉しくて、涙出た。恥ずかしいです。



図8 「白鳥の湖」（撮影：鵜飼正樹）

だからごまかして、踊る仕草が何かして（涙を隠して）、嬉しくて嬉しくて。で着替えて、皆さんちゃんと拍手してくださったから。

そうしてそこを出て、向い側にある信号機のところを渡ろうと思って信号待ちをしていたら、女子高校生2人がね、私のそばへ来て何とか何とかって、私の手に何か渡したような感じがした。そして恥ずかしそうに走って行ったの。で、こう聞いてみたら、50円玉1個ね、私の手に握らしてくださったわけ。たぶん竹筒置いたところでね、他の人と一緒に入れるのが恥ずかしかったんですね、その女子高校生は。それが嬉しくて嬉しくてね。今でもできればね、私の手に50円玉をカンパしてくださった、もうその方だって、昭和43年に女子高校生で、相当な歳なんですけど（会場笑い）、できれば会ってみたいなあという思いはね、ずーっと続けてきました。

でもその頃見た方ね、去年、銀座に行った時に会いました。「昔の数寄屋橋公園のところで見ましたよ。今でもやっているんですねえ」って懐かしそうに、「頑張ってください」と。相手の方ももういい歳でしたね（笑）。

鵜飼：（笑）。それをきっかけに、しばらくの間は、数寄屋橋公園や渋谷で踊られて。

ギリヤーク：次の日も行ったんですよ。26日の土曜日やって、日曜日も。そうしたらお巡りさんが出てきて、メイクしている時から、お巡りさんが来たのかな。年配の人が、ちょっと交番に来てくれというのでね、来いって言われてもすぐに行かないで、踊り終わってから行ったら、「おまえ何者だ」っていうんですよ。だから、「舞踊家だ」って、私言っただの。そうしたらね、「舞踊家なら舞踊家らしく、舞台でやるもんだろう」っていうの。「こういうところでやっちゃいかん」と言われたの。「今度やったら、罰金取る」と言われたの。知り合いの絵描きさんも見に来てたから、相談したらね、「じゃあ数寄屋橋公園にこだわらないで、東京中、どこでもいいから踊る場所があるから」と。

京都への思い

ギリヤーク：それから渋谷のハチ公前のところへ行ったり。あそこは右翼も来てやっていたり、その頃まだね、テキヤさんというか、恐いお兄さんたちがいて、私が踊り終わるとね、見ているわけ。投げ銭の、いくら入るとか。でみんなお客さんが散った後に、着替えて帰ろうとすると、「そのカンパを半分よこせ」と言ってくる。そうすると、目の前に、渋谷のハチ公前に交番があるけど、私も違反しているんですよね。行けない、それ知ってるから。そしてね、京都の三条大橋で、昭和46年だかのね、8月の16日、大文字焼の日に。

鵜飼：はい、さっきのお話ですね。

ギリヤーク：踊った時もね、写真撮ってくれたカメラマンの人が、「ギリヤークさん、ちょっと目つきが悪いのいるから、ここはね、早く退散した方がいいよ」って言った時に、もう僕メイク落とさないでズボンと上着を羽織ったらね、前で見えてくれてた熱心な学生さん2人いたから、その1人が京都大学の学生さん。鞆とかみんな持ってもらって、京大の熊野寮ってところに行ったらね、絶対大丈夫だと（会場笑い）。

鵜飼：（笑）。

ギリヤーク：そういうご縁があってから、京都の皆さんはね、みんな応援してくださる。京都の場合はね、フンドシ1本でもね、みんな逃げないで見てくれて、いいものを見せてくださいましたとか。やっぱり文化的に高いところだなあと、その時しみじみ惚れましたよ。一番、京都で踊って印象的だったのは、三条大橋って立て看板あるでしょう。あれを見た時にね、芸能の故郷に帰ってきた感じがした。あとになってわかったけど、出雲の阿国さんという人がね、今から400年以上前に京都の…。

鵜飼：四条河原で。

ギリヤーク：ええ。なるほどなあと。そのときは知らなかったと思うんですけどね、芸能の由緒のあるところだと聞いていたわけ。河原はね。だから本当に落ち着くところへ落ち着いていた感じで、そこで大道芸人として頑張っ

ていこうとする、腹ができたような感じがした。

警察とのかけひき

鵜飼：ギリヤークさんが、これでプロとして大道芸をやっていくんだという気持ちになったのは、いつ頃からですか。

ギリヤーク：街頭っていうのはね、同じ場所でもカンパの入る時もあるし、入らない時があるのね。それから東京はしばらくお巡りさんも、お金を取らないとまだ、交番に行ってもそんなに文句は言わないで釈放してくれるんだけどね。カンパもらっているとね、「お前、やるに事欠いて」。なぜあれがダメかというのと、道路交通法違反になるんですって。路上で勝手に踊ると。警察署へ許可を取りに行っても、絶対にくれない。それでカンパをもらっていると、始末書も2、3回取られました。ファンの弁護士さんがいたので、渋谷のハチ公前のところで、フンドシ1本で踊っていたら、パトカーがきて渋谷本署に連行されて、普通に衣装を着て踊っているのならばまだしも、フンドシ1本だと。フンドシ1本でも、歌舞伎だつてあるでしょう。僕は衣装だと思っ

ていけど、お巡りさんから見ると、裸と同じような解釈ですね。
それだったら、交番のお巡りさんも、3、4カ月、あるいは半年で場所（勤務先）は移動するから、1回捕まったらその場所は止めて他のところにする。そういうふうやって。それからお巡りさんのなかにも、青森県出身のお巡りさんっているのね。渋谷のハチ公前でやってもね、ふるさとに帰ったようで懐かしいのか、踊り終わって、カンパもらってから来ます。「終わったからもう、あんまり派手にやるなよ」なんて。だから、それはそれでありがたいなあとと思ってね。とにかく道路交通法違反というので、今まで40年間のうちに、87回ぐらい、捕まったり連行されたり。

凱旋門をバックに、シャンゼリゼで踊る

鵜飼：DVDにもありましたが、海外でも何度も公演されていますね。

ギリヤーク：パリに行って踊りました。昭和50

年。憧れて。なぜパリに行ったかというところ、あそこは大道芸のメッカだっていうの。ところが私が昭和50年に行った時は、街の中ほとんど大道芸やっていなかったですよ。路上でものを売り、何かやったりするのが、すごくうるさくて。でも上手に踊って。やっぱり一番踊りたかったのは、凱旋門をバックにして、シャンゼリゼで踊りたかったわけ。その頃パリに行ってきた日本人の有名な絵描きさんがね、「パリは芸術の都だ。君みたいなフンドシ1本で踊ったって、誰も振り向かない」と。それ嘘でした。「じょんがら一代」の衣装で凱旋門をバックにして。どうしてもシャンゼリゼで踊りたくて。

そうして赤い衣装に着替えてやりだしたら、丸い帽子のお巡りさんだけは気をつけたの。警官だ。それがいないところを見計らって、ど真ん中であれしたら、何か騒々しくなってきたの。やってるうちにちょっと見たらね、革ジャンのギャングみたいな顔をした人が立っているわけ。あれ、この人は観客になったら、それ私服刑事。その後ろに制服のお巡りさんもいて、パリ警視庁へ護送されて、連行されました（会場笑い）。私の情報を聞いていたんです。

連行されたら、一昼夜、ブタ箱に入るんです。それでね、1万円、日本のお金にして。だからそれだけ取られてきついなあと。往復切符の他に、そんなに持ってきてないでしょう。カンパで稼ごうと思っていたから。で、パリ警視庁に連行されました時に、シャンゼリゼで見てた観客の中で、日本語で話しかけてくださった人がいて、新聞記者なんですね。東京に2年だか、いたというんで、ちょっと日本語が話せて、「心配いらない」といって、護送車に乗った。護送車っていうのはね、大きいのね。網のかかった、刑事犯とか政治犯の人をあれするのと一緒でね。僕後ろの真ん中。両方側ずーっと、もう乗ったら逃げられないようにね、いや、逃げるはずないんだけど（笑）、両側ずっと、刑事とお巡りさん。で横に新聞記者の人が乗ってくれた。「心配いらない」と。

パリ警視庁に連行されたら、フランを1万円分数えてたの、「今晚留置されて、1万円払うと釈放されるんだなあ」ってね。ジャーナリストの人が「ちょっと、パスポートありますか」って、一緒に行って。そしたら、ちゃんとネクタイ締めた恰幅のいい人でね、交通係長みたいな人が、いきなり私に握手する。おかしいなあ、僕悪いことをしたんでないかなと思ったらね、「シャンゼリゼはパリの顔です。あなたの衣装、これは派手すぎます。ちょっとここではご遠慮ください」と言ってね、釈放。

そう思ってよく見たら、シャンゼリゼ行ったら、まず僕、人の流れ見るんです。みんなね、女の人、奥さんたち、ダイヤモンドをね、1つでないですよ、こんなに（たくさん）はめているの。みんな1万円札に見えたけど、ここでやったらすごいカンパだと思ってねえ（会場笑い）。

鵜飼：ああ（笑）。

ギリヤーク：そしたら言われたの。「お金持ちが来るところだから、パリにいる大道芸人でも、シャンゼリゼだけは遠慮するんだ」。そういうことを僕は知らなかったの。でも、パリ警視庁の交通係長は握手して、にこやかに釈放していただきましたよ。それだけは日本と違いましたね。

日本だとね、始末書も書くんですよ。「二度とやりません」って書かされるわけ。「はんこ持ってます」って言うてもだめなの。この手だかでね、お巡りさんがこういうふうにする（5本指全部の指紋を無理やり押捺させる）から、ほんとに悪いことしたんでないかという罪の意識で、嫌な感じね、今でも。何回か罰金とられてあれすると、1回そういうことがあったところは、しばらくは、半年はやらないように。でも青森県出身のお巡りさんみたくな、好きな、応援してくれるお巡りさんもいる。「じょんがら」が好きでね。警視庁の捜査一課の人が、「じょんがら」が好きでね、「また踊ってください。何かあったら電話くださればすぐに釈放しますから」と言ったけど、使ったことはないんですけどね。

「ギリヤーク尼ヶ崎」を名乗る

鵜飼：今はギリヤーク尼ヶ崎を名乗っておられますけど、最初に大道で踊られた時は、まだ尼ヶ崎勝見という本名で……。

ギリヤーク：本名が、尼ヶ崎勝見が、「見」という漢字なのね。月見の「見」。ところが舞踊界にデビューした時、昭和32年の時、尼ヶ崎勝美で、「み」を「美」にしたの。だからよく私を、東京の舞踊家の方はね、女の舞踊家だと思って手紙が来たことがありますね。

そうしたら、昭和46年ころか、北海道へ慰問に行ったんですよ。そして夕張っていうところで、公民館で慰問したんですよ。司会してくださった方が、「今日やってくくださるギリヤーク尼ヶ崎さんを紹介します」と。僕キョトンとしてね。「尼ヶ崎さんです」っていわれたのでね、何だか気になるから、終わって宿に帰ってから、「何か英語みたいなことばだったけど、あれ何か」。「お前、アイヌの人知ってるか」、「ええ、温泉なんかでも、熊彫って、髭生やしているの、いっぱい見ました」ったらね、もう一つ、アイヌの人たちとは別に、少数民族で、ギリヤーク民族っていうのが、サハリンの方に多くいるんだけど、北海道の網走とかあっちの方において、集団でいると²¹。尼ヶ崎勝美じゃ、名前が出ないと言われたんですよ。だけどギリヤーク尼ヶ崎って、ゴロがいいしね、絶対売れるからって言われて。

それで東京に帰ってきてから、名刺に「ギリヤーク尼ヶ崎」って。その頃バーか何かで出たらね、ちょうど東大の先生もいて、私そこで1曲ぐらい踊ったと思うんですけどね。東大の先生方が私の顔を見てね、「そういえば日本人でないけど（会場笑い）、ギリヤーク民族に似た人がいた。系図か何かないか」と。あ、そうそう、うちの母が、子どものころサハリンにいてとか何とか言って言ったら、向こうの方にギリヤーク民族がたくさんいるからね、その系図みたいなものを見せてくれとか言われて。とにかくギリヤーク尼ヶ崎にしてからね、大学祭もね、ずいぶん人気ありましたよ。

「じょんがら」をモチーフとして

鵜飼：「芸人」や「白鳥の湖」など、最初は洋舞というか、ダンス系の踊りだったんですよね。「じょんがら」を踊り始められたのは、いつごろからですか。

ギリヤーク：「じょんがら」はあれ3年かかってます。「じょんがら一代」のバチさばき。最初は歩き回りもなく、ゴザしいて、テーブルコーダーをかけて、それでこう座ってね（ステージ上に座って実演の動きをし、その後ステージ上で座ったままになる）、そうしたら、こうやってる（首を振り、目をしばたたかせる）のが面白いってね、こう（拍手が）きたわけ。それでね、これはいけると²²。

そのきっかけを作ってくくださったのが、明治大学の学園祭で踊った時に、実行委員会のひとりの人が、「ギリヤークさん、津軽三味線で踊ったらいける」。その人のその言葉がなかったら「じょんがら」は生まれなかった。そして西洋的な踊りになったんだろうね。子どもの頃うちの父がね、三味線弾きだとかそういうところへ連れて行って、「勝見ちゃん、あれが名人だよ」と言ってたから、大学の実行委員会の人が言ってくれた言葉を思い出して、レコード買って聞いてみたら、今のようには、音楽が鳴ったら体が動き出して、「これはいける」。



図9 「じょんがら一代」のバチさばき
(撮影：鵜飼正樹)

でも衣装も着けて踊るまでには、3年かかりました。これ本当、これ一つでずっと踊っていて、そのあとに応用したのが「念仏じょんがら」。みなさん、もう1曲見たいなあというのでね。「念仏じょんがら」は、後半はほとんど即興ですね。

鵜飼：「念仏じょんがら」を踊りだされたのは、いつ頃からですか。

ギリヤーク：「じょんがら一代」ができて、バリに行った時はまだね、「念仏じょんがら」がなくて。あ、わかりました、昭和53年です。それがね、妹が1人いて、25歳で、昭和34年ころに亡くなったんです。1歳の時に脳膜炎をやって、その頃治るとね、頭が狂うの、治っても。で、助かったんですけどね。ちょっと知恵遅れのようになっていて、そして25歳で亡くなる時、可愛がっていたおばあさんがいてね、先に亡くなっていて、自分も死ぬって意味が分かんないから、はやくおばちゃんのところ、北海道では「ばばちゃん」っていうの。「ばばちゃんのところ行きたい行きたい」って言ってたのが、25歳で亡くなる時に、お医者さんからね、今晚もう一晩くらいしかもたないって言われた時に、うちの母が妹の所に行って、「ばばちゃんのところ行くか」って言って。死ぬっていうこと。僕は横で見えて。かわいそうだね。それでいつか妹のために供養の踊りをつくりたいと。20年かかりました。昭和34年でしょう。それで昭和53年の5月、成田空港ができた時に行つて。

だから「念仏じょんがら」を初めて発表したのは、ニューヨークだったんです。その前に音楽はできていたんですけど、なかなか衣装とかできなくて、振りの方に困っていた時にね、そうしたらね、ふっと浮かんだの。私のお菓子屋の生まれでしょう。結構お菓子食べていた。お菓子屋さんでだいたい入れ歯が多いんです。虫歯が多いわけ。そうしてね、差し歯2つか3つあったけど、歯医者さんからね、どうせみんな虫歯になるって言われて。「よし」って言って、まだ「念仏じょんがら」なかなかできないでいた時にね、昭和53



図10 入れ歯をはずしておばあさんを表現する「念仏じょんがら」（撮影：島橋亮）

年の1月。うちにいて、ふっと思いついて差し歯を外して顔を見ているうちに、あっと思いついたことがあって、歯医者さんに行つて、「いい歯を全部抜いてくれ」って言ったの。

鵜飼：へえ一つ。

ギリヤーク：そうしたらね、「いやあ、あとで後悔するよ」って。「いやいいから抜いてください」って。で、いっぺんに2本も3本も抜けないから、半月くらいかかって、1本抜いたらまた何日かして。そうして歯が抜けてね、ガーゼあててた時の顔見たら、ハッと見てね、「念仏じょんがら」の動き浮かんだの。70、80のね、僕の顔が、おばあさんになっていた。それを見て、動きが何となく。これで、妹の供養の舞ができると。そして初めて発表したのが、ニューヨークだった。

鵜飼：なるほど、「念仏じょんがら」は、妹さんの供養のために作られた踊りなんですね。

命がけで踊った阪神大震災

ギリヤーク：それがどういうわけかね、今度は阪神大震災あったでしょう。私神戸のほうはね、平成元年から踊っているわけ。あれ、1995年、平成7年だからでしょう。

鵜飼：はい、そうですね。

ギリヤーク：ちょうど阪神大震災のあった頃、神戸の人たちには、世話になっていたからご恩返ししたいなあって言ったらね、東京にいる絵描きさんが、こう言ったの。「ギリヤークさん、今行つて神戸で踊った方がいいよ」。というのはね、「今は食べるものとかあれで

やってるけど、それが満足されたら、今度は精神的にまいってくるから、そうするとみんな力落としているから、ギリヤークさんの踊り見たら元気出るからね」と。そうは言われても、ファンの人に連絡とってみたら、神戸のほうもそんなところでない。自分たち食べるだけで今は精一杯でね、まだ踊りを見たりする余裕もないと、10人のうち5人くらいはそう言った。ただしあとの半分の5人は、「いい、ギリヤークさん来て踊ってくれ。その方が元気が出る」と。私は半々のうちの、元気が出るって方に賭けた。だから新大阪までは新幹線で来たけど、あとは全部荷物持って、バス乗ったり歩いたりして、やっと神戸について。神戸の旅館もね、泊まる人なんかいないの。だからずいぶん安くしてくれた。その代わり水道も出ない。食事は、中華街がやってたから、ファンの人がそっちへ案内してくれた。

そうしてそこで、1カ月あとですから2月の17日なの。だいたいお昼ちょっとすぎですか。神戸の被災地に行ったら、何か瓦礫の匂いもしているわけね。何となく異様な雰囲気なんです。で、何だか普通のところと違うなあと。菅原市場²³のところ。そして衣装に着替えてメイクして。で、荷物持っていた時は普通の人間なんです。尼ヶ崎勝見なんです。ところが着替えていくにしたがって、僕は大道芸人に気持ちが変わっていくんですね。メイクが終わって見たら、普通の服装で現れた時とは違ったね、妙な妖気がただよっていた中で、「じょんがら一代」を踊ったんだけどね、踊りをど忘れしたんですね。間違っでごまかして踊ったの。年取ってきてからは、けっこう踊りは間違えます。浮かんでこないの。ただし音楽が鳴っていると、間違ったまま動かしていると、合わせていればだんだん合ってくるんですよ。出てくるの。それがその時だけは出なくて、本当にごまかして踊ったわけ。で、ふっと感ずるところがあって、「じょんがら一代」やった時は、皆さんわざわざ東京から来て供養しているんだとかそういうのいないと、「もっと生きたかった」と叫

んでいるようでね。(次の)「念仏じょんがら」の時は、僕も精魂込めてね、何も考えないで「念仏じょんがら」踊るしかないって。命がけで踊りました。

祈りの踊りへ

ギリヤーク：そうして踊り終わってみてね、感じ取ったことがあります。それまでは、東京で林武先生²⁴がね、昭和47年頃、私の踊りを見て、「君のは鬼の踊りだね」って言うてくれた。ところが阪神大震災の現場で踊って、亡くなった人が「供養の舞はいらない」と。「もっと生きたかった」と叫んでいるようでね。そうか、そうすると僕の大道芸で求める境地というか、気持ちね、何かというと、「祈りの気持ち」なんだなあって、そこで感じ取ったわけ。それまではギリヤークさんって鬼の踊りだよってなっていたけど、鬼の踊りっていうより、自分で阪神大震災の1カ月後に現場で踊ってみて、亡くなった人がもっと生きたいと叫んでいる。本当にメイクをしたから見えてくるんですよ。そこで踊りを見てくれた人がどう思ってくれたかはわからないけれど、私には霊が生きているようでね。そうか、僕は生涯かけて、踊りの上で求めていく気持ち、祈りの踊りだ。

で、今41年目になるでしょう。40年間踊ってみてね、まだ祈りの踊りというか、14年ですか。阪神大震災から。それから朝日新聞の記者で小尻さん²⁵ね。あれも、尼崎で踊っていた時に、小尻さんの写真を持ってきてくれ



図11 向かって左から阪神大震災、小尻知博記者、JR福知山線脱線事故の写真と、ギリヤークさんの母親の遺影を並べる(撮影：鵜飼正樹)

たカメラマンさんがいてね、「ギリヤークさん、震災の人と一緒に、供養の舞をしてくださいませんか」と。「ああ、それなら喜んでやります」と。で、やっているうちに、3年前だか、（JR福知山線の）列車事故²⁶が起きたでしょう。そうすると、ファンの人がちゃんと列車事故の記事を新聞から切り抜いて。

だから私、関西で踊る時は、まずうちの母がずいぶん私を励ましてくれたから、母の遺影というか、平成3年ですか、82歳で亡くなった。私が北海道公演に行っている時に亡くなったから。普段親不幸してもかまわないから、親の死に目に会えない不幸はするなって言われて、それで北海道公演行ってる時に、東京で母が、クモ膜下出血っていう病気で82歳で亡くなって。それで北海道で踊った時に、最初の「夢」っていう踊りでね、ちょうど前の日に母が亡くなったことを知って、踊り間違えました。あまりに悲しくて。いつもだと北海道の青い空がきれいだったんですけど、そのときの北海道の青い空がね、悲しみの色だなあってそのとき思っただけで。母の遺影と、それからこっち（関西）で踊る時には、その阪神大震災の時の（写真）、それと朝日新聞の襲撃事件で亡くなった小尻さんと列車事故の（写真）と置いて。今まで14年目になるんですが、さっきちょっと（DVD）を見て嬉しかったのが、（JR事故の）1周忌の時に「じょんがら一代」踊った時に、警備員の人に来て、ここでやっちゃダメだって。

鶴飼：尼崎の脱線事故の現場ですね。

ギリヤーク：よくあれをやって（DVDで上映して）くれた。僕ね、あの1周忌の時の踊りが、初めてこれは、少しは祈りの踊りになったんでないかなって感じしました。やっぱり亡くなった人の供養じゃなくて、身内にとっても、本人にとってみても、「もっと生きたかった、命を返してください」というのが、やっぱり本当の気持ちでないかって。そうすると、死ぬまで私、踊り続けても、まだ祈りの踊りに達しない。ていうのはまだ、亡くなった人たちの気持ちになつたら、まだ私の踊りでは、祈りの気持ちになっていない。それ

でも「死んだ人を返してください」とって、「命を返してください」とって、よく言えたなあって、初めて。関西行って、14年間でこういうご縁で踊らせてもらって、そのうちの1回だけね、祈りの気持ちで踊れたのが、列車事故の1周忌の時の。やっぱりね、亡くなった人の供養とか、どんなに立派なお葬式を挙げてやっても、亡くなった人の無念さっていうの。僕は、死ぬまでそれを忘れないで、生きていくしか、私の祈りの気持ちってないなあって。だから、僕今度『平和の踊り』作ったでしょう、必ずこのシーンだけは。それをさっきね、（舞台袖から）見たら、うまく（DVDの編集で）やってくださったから、いいところを選んでくださって。

ペースメーカーをつけるようになって

鶴飼：ありがとうございます。ちょっとお水でもどうでしょう。ちょっと休んでください。私も、椅子じゃなくて（笑）、じかに座ります（舞台上で2人ともあぐらをかく）。

ギリヤーク：私ね、12年位前から、右手のほうも震えが出て、止まらないんですよ。両足もね、震えてるでしょう。だから年賀状書くのに、郵便番号ね、小さくて書けないです。そして、ほとんど薬漬けです。いろいろ病気もあって。膝は、昭和58年から9年にかけて、「じょんがら」を踊る時に、素足で踊ってたんですよ。で、地面をぶつけるもんだから、その頃、有名な整形外科の人に手術してもらってね。半月板っていうんですけど、両膝割れて、それで膝を手術して、もう何十年か経



図12 舞台にあぐらをかいて話し込む

っているとね、また痛んできていますから、サポーターしても痛みが出ます。それで痛み止めの薬をね。今年夢にも、ここでこういうふうに踊ったり上映会やるとは思っていませんでした。去年の12月の半ば…。それまでは、あの…。

鵜飼：肺気腫。

ギリヤーク：肺気腫でね、苦しくて。肺の病気だっていうんで薬もらっているうちにね、どうも心臓の方もよくないぞって、心電図撮ったら、（測定機器を）1日つける検査の仕方なんです。家帰って、練習でも何でも好きなようにしていかまわないと。で、それ見たら、去年の11月の末ですか、もう心臓が4秒か5秒くらい止まってる。これ今日にでも手術しないとダメだって言われて。「実は私こういう踊りをやっているんですけど、そういうペースメーカーつけて踊れるんですか」って聞くと、データないんですよ。スポーツの選手がなんかやった、大丈夫だってデータはないわけ。このままだと倒れるって言われて。で、12月の16日に入院して、17日に手術したの。で3カ月間は安静にしていました。動いてはダメだって。

ここんところ（胸）に、電池ですね、こうあって、コードっていうか、金属がなんかがたぶん心臓の方へと繋いでるわけ。そして、踊りをやっていた心臓が止まったら、ビリビリと電気みたいなのがバツと……。何だか動いてない感じ。（じょんがらの）パチさばきやるの苦しいんですよ。今日もかなりね、苦しいけど、緊張すると、逆に痛みを忘れることもあるんです。だから今でもお話終わって、このあと踊ると思うと、ちゃんと踊りきれんかどうか不安だけど、やれるところまでやってみるしかないな。

鵜飼：ちょうど僕がこのシンポジウムの件で、ご連絡した時は、手術をされて1カ月くらいで、ほとんど出歩かないっておっしゃっていましたね。

ギリヤーク：病院の先生に聞いてもね、的確なアドバイスはできないから、自分で自分の体だからね。これで関西公演大変でした。無事

にね、東京に帰れないんじゃないか。4月の26日から…。

鵜飼：5月の5日まで。

ギリヤーク：最初大阪やって、29日が阪神尼崎駅前やって、5月3日が円山公園で京都でやって、そして5月5日が神戸でやって。それから大阪で上映会やってね。大変でした。苦しくてね。疲れが取れなくてね。

大道芸人に切り替わる瞬間

ギリヤーク：関西公演で一番緊張する場所は、京都なんです。円山公園。大阪のアメ리카村とか若者がいるでしょう。わりとリラックスしますね。たこ焼食べたりなんかしてるから（笑）。

鵜飼：そうですね。

ギリヤーク：ジーパン履いて、昔東京で流行ったみたいなタケノコ族がいるようなのね。そして尼崎は午後2時からやるとなると、10時くらいからもうね。尼崎市の人じゃなく、どっかから来て、噴水のあるところで、「念仏じょんがら」が見たいと、待っていてくれたりしてね。労働者の人たちがいる、庶民的なあれがあります。ところが京都だけはね、京大、学問のレベルの高い人がね。学生さんっていうか、みんな頭も切れる。何となくプレッシャー感じます。大変ですよ。



図13 関西で一番緊張するという京都・円山公園にて（撮影：鵜飼正樹）

鵜飼：このあいだも、おっしゃってましたね。

前でじっと見ている怖い人がいたって。

ギリヤーク：ええ。今日もね、こういうの（舞台上での実演）やったことないから。芸をやる人皆そうでしょうけど、舞台上で待っている時はね、何十年もやっている人でもね、越路吹雪さんという歌手の方も、歌う前は、舞台の袖にいて、ものすごい緊張していたっていうのでね、安心しました。ああいう人でもね、あがるんですよ。緊張、葛藤があるの。そうして舞台上に現れると、歌手に変身するんだね。それできなかったらもう、ダメですね。その、どうしてそう切り替わるのか。私もいまだ、そこんところは分析していない。そんな余裕ないですよ。

鵜飼：ギリヤークさんも、やっぱり切り替わるわけですね。

ギリヤーク：なんですよ。だから一番いやなのは、2時なら2時で東京で踊るとするとね、2分くらい前が一番いやですね。もう逃げられないし、もう腹を決めてね、そしてきっちり2時に。でもお客さんが空けてくれるのね、通り道を。もうそこからは芸人になってるんだね。花道。で、お客さんの前に現われた時はね、袖にいて不安に思っていたのはね、バーッと消えて、大道芸人です。

流れを見る

鵜飼：ギリヤークさんは、お客さんの前に現われたら、流れを見るとおっしゃっていますね。いつも片膝立てて、周囲を見回して、ツバを手にはきかけてから支度されますよね。あれはやはり大事なんですか。

ギリヤーク：おもしろいところを見てくださいますね。（笑）。

鵜飼：写真もありますよ。

ギリヤーク：ああ、そうですか。あれ大事なんですよ。たぶんね、最初からああいうふうにしたんだと思う。

鵜飼：はい。

ギリヤーク：あのね、今この場合（五條会館では）みんな客席ですよ。で僕の踊るスペースがここでしょう。現われたらまだね、大道



図14 大道芸人に変身し、踊るスペースを確かめる
（撮影：島橋亮）

芸人になってないんですよ。衣装もつけていない普通の人間なの。でまず荷物を、段取りというか、テープレコーダーをつけて、自分の踊るスペースというか、空間をまず確認。もう大道芸人になってる、その頃は。来るとこまでは普通の人。で、現われたとたん、変身してなければダメなんです。そうするともう、あれです。大道芸人になって、ずーっと（周囲を）見ていって、たぶんあれは、一息入れて、空中の空気というか、自分の力に呼び込むんだね。そして手にツバをつけて。それでね、ずーっと、僕の踊るスペースだっているのをね。それ確かめないでね、時間ですよっていうので、それだけで踊ったんじゃない、何か大事なものを忘れた気がして。あれですね。あれ大事なんです。

鵜飼：お客さんの様子を見渡す。

ギリヤーク：いや、様子は案外見ていないんですよ（笑）。あのね、一番前の人、目が合ったらダメです。地面の座っている境のところ。ちょうど、ずーっと、みんな座っている、前のコンクリートのところ。

鵜飼：足元。

ギリヤーク：足元。そこからこっち（手前）が、僕が踊る舞台だと確認とるため。で、ずーっ

と見て頭に入ったら、手にツバをつけてから、空からエネルギーをもらって。そして下っ腹に力入れて、あとはもうね、地震が起きようとなにしようと、踊り終わって「これで終ります」っていうまで、葛藤を続けるしかない。これも楽しいあれでなくて、葛藤ですよ。自分との、それから観客との葛藤。その中でエネルギーを出して、お客さんからももらって。そういう大道芸の空間というのは、仮に室内であっても室外であっても、作れるかどうかは、だから賭け。

お客さんからエネルギーをもらう

鵜飼：大道芸も、うまくいった時と、なかなかうまくいかない時があると思うんですけど、その違いというか、うまくいくのはどういう時なんですか。

ギリヤーク：あの、うーんと練習してきてね、今日体調いいからと。それで踊りもよくできるはずだと。大抵の場合はそうかもしれないけどね、その場所、それから観客にもよるの。それから踊るスペースから、全部含めた中でね、何となく違和感を感じるというか、自分が乗り切れない時って、集中力のあれ、わかりますね、踊る前にね。今日は何か調子悪いなってなるとね。メイクしていてね、大道芸

人に変身していく、あの時間が大事なんです。普通の人間に現われて衣装に着替えて、ちゃんと演目見せるまでのうちに、ギリヤーク尼ヶ崎という大道芸人になってないとダメなんです。そのときの体調とか、集中力でね、なりきれない時っていうのは、演目を2つなり3つなり、3つ全部でなくてもいいから、どこかで、自分の集中してできるように、努力っていうか、ものすごい葛藤があります。

お客さんのほうはね、ほとんど、頭に入ってきてません。もう自分の踊りがうまく行くかどうか、集中力があるかどうか。大道の芸は集中力ですね。特に街頭っていうのは、天井が無限の空なんです。ここ（五條会館）の場合、照明が見えるけど、それが、上を見ると空がある。それも空間なんですよ。客席なんです。そして、お客さんがいる、目に見えているところ全部が舞台なんです。

鵜飼：ええ。

ギリヤーク：その中で、お客さんのエネルギーを出して、出しっぱなしならだめね。うまく踊りがいった時には、お客さん必ずね、こっちへエネルギーをね、無意識かもしれないけどちゃんとこう。そうやって、丁々とぶつかってやるのが、私は大道芸だと。ただ街頭に出て、ただ踊って、これで終りますっていうのではなくて、こっちが力いっぱいエネルギー出したら、見てるお客さんも見ながら、またお客さんも無意識に僕のほうへ、集中力をやっていると。それをまた受け取って、僕のエネルギーにして。だから、出だしで今日調子悪いなあって思ったらね、お客さんの方からうまく、エネルギーをもらって。

鵜飼：そんなことがあるんですか。

ギリヤーク：あるんですよ。そこ分析、うまいことしてませんけどね。今日はお客さんのおかげで、「念仏じょんがら」うまくいったと。お客さんがのって、僕の無意識に、お客さんの方がこっちにね、無意識にエネルギーをね。

鵜飼：くださる。

ギリヤーク：うん。無意識にしてるわけ。それをこっち、次に踊る、最後の「念仏じょんがら」なら「念仏じょんがら」の時に、それを



図15 メイクをする（撮影：島橋亮）

体の中にいっぱい貯めて、お客さんからいっぱいエネルギーをもらってこれで、もう足も1歩も。あれですね。私の踊りは命がけですね。こんな病気になったから、みんな心配してね。軽くできない踊りなんです。

鵜飼：ええ。

ギリヤーク：津軽三味線のね、選んだ曲も、名人中の名人っていわれてね、ものすごいテンポが早いんです。だからそれについていくだけでも大変だしね。だからもしも津軽三味線のあれがなかったら、私ね、普通の舞踊の研究所で先生になって、普通のバレエみたいなね、ああいうの教えて、発表会やってたかもわかんないけど。

即興で生まれた「水をかぶる発想」

鵜飼：「念仏じょんがら」でギリヤークさんは、お客さんの輪の中から外へ飛び出して、走っていかれますよね。あれは、初めから考えられていたんですか。

ギリヤーク：いや、即興だったの。あれね、一番最初ニューヨークで「念仏じょんがら」やったでしょ、昭和53年の、7月でしたか、妹の供養のためにね。そのときにね、いっぱい黒人の方が何百人と輪になってね、踊ってきたら、こっちも暑苦しくなってきたのね。圧迫感が。みんな、黒人の人、ぐーっと、こうして（集中して）見ているわけ。それでね、「念仏じょんがら」で踊っているうちにね、何だか息苦しくなって、輪を飛び出していったところに、噴水があったの。そこに飛び込んだじゃったのね。即興でした。そうしてずぶぬれになって、そうしたらね、見ているお客さんがまたバーッと、噴水の周りにね（集まってきた）。たしか昭和53年の時でね、「ニューヨーク行ったら、スリがいるから気をつけなさい。油断しちゃだめだ」って。でも、財布からあれから、みんな、テープレコーダーのところに置いていて、噴水のところに行ったでしょう。そしてずぶぬれになったら、お客さんみんなまた元のところ戻ってくる。ニューヨークってすごいと。観客が、こういうふうにしてお客さんがついてくると。それ



図16 「念仏じょんがら」で池に飛び込む。京都・円山公園にて（撮影：山本さやか）

で踊りきってね。それがきっかけで、東京に帰ってきたらね、踊るところに噴水なんてあるわけでないでしょう。それで、水がかぶったら元気が出たの。だからね、噴水ないけど、輪から飛び出してね、行ったところで、バケツを置いておいて、水をかぶる発想って、それから出てきたの。

鵜飼：いったんお客さんの視線が、ギリヤークさんに集まっているところが崩れて、また最後、戻してくるっていうところが、やはりすごい迫力がありますね。

ギリヤーク：いやいや、いっさいああいうはずみになったの。ニューヨークで踊っていると、こっちは中で圧迫感感じたの。みんながこうやって、すごい、黒人の方が。お金のない人が多かったからね、タダ見ですよ。みんな目をこらして、真剣なの。やっぱりそれが一番受けてたんだよね。それを知らないで僕、それで飛び出したのもね、圧迫感があって、つぶされそうになったから。だから僕の計算したものじゃない。

鵜飼：最初は計算したものではなかったんですか。

ギリヤーク：よく走っていくでしょう。自分の踊りに没頭しているから、実際はね、そのあ



図17 「念仏じょんがら」でバケツの水をかぶる。
京都・円山公園にて（撮影：鵜飼正樹）

とどうなっているのかなあと、僕いないとき。そのお客さんの空気っていうのは、私わからないんですよ。自分で飛び出して行って、先の方行って転がったりね、なんかやってる。

ロシア行った時にはね、有名な銅像があったのね。そこによじ登っちゃってね、数珠もってこうやって（振り回して）、あとでテレビに流れてた。あとで苦情が来て、何か、あれ大事な尊敬する人のあれ（銅像）なんだって。こっちで言う楠木正成とか、知らないけど。「念仏じょんがら」で走って行って、水かぶったあと数珠ふったら、えらい苦情ね、市役所の方だか来て。それからモスクワでやる時はね、水かぶってはだめ、電柱によじ登ってはだめ。クレームたくさんつきました。

カンパについて

鵜飼：ちょっと聞きづらい質問ですが、カンパっていうか、お客さんからいただけるお金で、これまでで一番多かったのは、いくらぐらいなんですか？

ギリヤーク：それはね、12年位前ですか、東京でね、毎年やっている、10月の体育の日あたりですね。そのとき78万円っていうのが一番入りましたね。それから北海道では、その前

後、札幌で43万くらいですか。

鵜飼：数寄屋橋公園で初めて踊られた時は、カンパはいくらぐらいあったんですか。

ギリヤーク：初めて街頭でやった時はね、1500円くらいですかね。でもその1500円がね、励みになりました。知り合いの絵描きさんがね、せいぜい入って200円くらいだろうって言うてたのを。その後、女子高校生が、50円をカンパしてくれた。あれがあったからこそね、そのあともね、一時期東京では、警察の方で、カンパもらったら余計ダメだって言われたのを、歯を食いしばって、カンパもらわないで、やってたのが1年くらいありましたね。

鵜飼：カンパが多い時は、踊りも良くできた時なんですか。

ギリヤーク：お客さんがいてもね、いぎ芸をやる時になると、どれくらいお客さんがいるか、ほとんど目に入っていないの。踊りのことに没頭しているから。例えば今日若い人も来てたのかなあって、僕も年取ってきたから。北海道なんかお年寄り多いんですよ。それは「念仏じょんがら」見たくてね、来るんだよね。だから若い人いないんだろうなっていうと、一番前の方で、若い人見てたよって言われても、こっちも人の前で踊る時になると、幕かかったようになってね、みなさんの顔の



図18 踊り終わってカンパを集める。観客との交流の時間でもある（撮影：鵜飼正樹）

表情まではっきり区別つかないんですよ。だから夢中ですけど、やっぱりお客さんは少ないよりも多いほうが、カンパがね。街頭で芸をやっている人は、演奏でも何でもそうだろうけど、うまく演奏できたり踊れたりするとね、終わって一番気にするのはカンパだと思います。いくらくらい入っているかなあっていうのは、気になるもんで。それと、わかるもんですね。

鵜飼：わかるんですか。

ギリヤーク：帽子あるんですね。だいたいこれくらいの帽子をただポンと置くんです。で、僕がこうやって（頭を下げて？）いるとね、入れている。そうすると、「ギリヤークさん重いからね、どっしり入っているからね、たくさん入ったよ」というと、ああ今日はカンパ少ないなあ。いちばん入るのは、お札です。かさばって軽くて、しかも膨らんでるのね。そうして大きいと、今日はすごいと。そこが重いというと、100円玉とかが多いなと。今は50円玉もあるから、あれも違ってきますよね。大道芸人の人は、今日いくらカンパあったかと、やっぱり多ければ嬉しいし、少なければ、自分の芸が、やっぱりカンパいただくほどの芸でないのかなあって、あると思います。

「よされ節」の秘密

鵜飼：さっきギリヤークさんはお客さんが見えないとおっしゃっていましたがけれども、「よされ節」でお客さんと一緒に踊られるところがありますよね。そのときに引っぱり出すのは女性で、しかもなぜか美人ばかりだと、お聞きするんですけど、そのあたりはどうなんですか。

ギリヤーク：あれね、北海道行くとね、札幌までは良いんですけど、釧路とか根室とかあっち行くとね、だいたい見に来る人は年配の人ばかりなのね。そうするとね、見るのはいいんですね、観客として。でも「よされ」で誘って「どうですか」と手を引っ張ると、こうやる人（断るポーズ）多いんです。大阪、それから阪神尼崎駅前とかね、それから京都



図19 「よされ節」で観客と踊る（撮影：鵜飼正樹）

も、わりと前のほうにね、演目見せて、「よされ節」って言うまで決まっていらないです。そのとき（一緒に踊る人を）決めるんです。それまではその踊りに没頭している。今度「よされ節」って……。

鵜飼：踊りの演目が書いてあるのを持って、回って見せる時ですね。

ギリヤーク：「よされ節」って演目必ずいいますから、そのときまでは、誰と一緒に踊るか決めていないんです。幕がかかったようになって見えない。踊っていて目の前の人の顔があんまりよく見えるようだったら、踊りが良くない。集中力が無い。

鵜飼：そうなんですか。

ギリヤーク：だから、集中力がある時はね、幕がかかったようになってね、見えないのがほんとうですね。ここに誰がいる、誰さんがいるってね、踊りに集中できてない。だから、「よされ節」の時、すごく真剣ですよ。誰か、一緒に踊ってくださる人を誘わないといけなからね。やっぱりどっちかっていうと、若い人のほうが、うまい下手気にしないでやってくれる人がいるしね、北海道の年配の人だと、見るのはいいけど踊り……。一度だけ1人で踊ったことがあります。やっぱり1人だと踊りづらいですね。ある意味での、自分も解放させて、遊びっていうか、楽しんでもらいたい。私の踊る踊りの中で、一番、ほっとして楽しいっていうのは「よされ節」ですよ。

鵜飼：「よされ、よされ、よされ節一つ」と言って、演目を出して回っている時に、あ、この人だなあと目をつける。

ギリヤーク：そのときに、わかんない場合もあるんですよ。いや困りますよ、こっちだって。わからないままテープレコーダー（のボタン）を押すしかないでしょ。そうしたら、もうぶっつけ本番で、どなたか、お客さんの前に行ったらね。1人でってのは、踊りづらいもんですね。間が持たないです。そうなったら、誰でもいいからね、引っぱってきてやる。で、平均していわれたんですけど、ギリヤークさん女の人より誘わないですね。そういうわけでもないけど（笑）。だって、ニューヨーク行ったら黒人の親子がね、僕の踊りの中で一番好きなのが「よされ節」なんですって。3回見てくれましたよ。好きで。あ、13回かな。「よされ節」が一番大好きだと。ニューヨークでは、楽しいもの、迫力のあるもの、イエス・ノーのはっきりしているのがアメリカ人ってのは好きなんですね。フランスに行くと、ちょっとひねった感じでね。文学的っていうかね。またちょっとアメリカと違ってますね、雰囲気かね。

命の続くかぎり、踊っていききたい

鵜飼：もうお時間です。最後に少しだけお聞きしたいことがあります。79歳になられるということで、お体を大切にこれからも踊っていただきたいと思うんですけど、80歳を目前にして、ギリヤークさんはこれからどうしていいこう思われているのでしょうか。今日お越しのお客さんを前に、何かお伝えいただく



図20 「念仏じょんがら」のクライマックス。大阪・アメリカ村にて（撮影：鵜飼正樹）

ことがあったらお話してください。

ギリヤーク：去年からね、最初肺気腫だと思っていた病気が、今度洞不全症候群というのが私の病名で、心臓の病気なんです。そいでペースメーカーをつけたわけ。そしてときどき激しく動いたりすると心臓が止まると。それでその時に動くようになってはいるんですけど、関西公演で今年初めてやってみて、（じょんがらの）パチさばきをやると、息ほとんど止めてやるような踊りだと、息が苦しくてね。ここ（ペースメーカー）ちゃんと動いてくれてないんでないかなあって不安がある中でね、これから今日踊る踊りでも、ここを転がったりなんかするとね、もう本当にお医者さんから見たらビックリするような動きも、病院のデータがないから、自分でやって、この踊りはダメ、この踊りは踊れるって、これから確かめて、その枠内でしか、踊っていけないだろうと。

鵜飼：ええ。

ギリヤーク：とにかくね、息が切れてね、呼吸がうまくいかないのは事実です、これをつけても。それで不安があるの。これをつけたおかげでいいのかどうか、わからないですけど。これから先は不安ですけど、僕は、やっぱり、街頭で死ぬまで踊っていきたいっていうかね、その気持ちはありますから。昔俳優の近藤正臣さんから言われたの、「この踊りは、70歳までは無理だなあ」って。それがもう70歳はるかに過ぎちゃったから。今それでも本当に息が切れてきたり、膝の半月板も、20数年前に手術したのが、また痛んできたり、きちっと正座はできないみたい。座って立つ時に押さえていた骨がこう外れかかるの。だからすぐ立てないですね。

そういう故障が出てきている中で、私は街頭で踊るのが、目の前でお客さんがいて、私が踊っているそれを、息を凝らして見ている。楽しんで見てくださっている。握手して下さる。そういう、これはまた室内の舞台空間とは違った、外のそういう空間。じかに人と触れ合うことができるでしょう。街頭のいいところは、吐く息、吸う息が、目の前のお客

さんとすぐに交流できるでしょ。お客さんの方からも夢中で見てるようでも、私に頑張ってくださいってエネルギーを出してくれてる。津軽三味線は原則として、目をつぶって踊る。目の見えない旅芸人が発祥で。こうやってね（目をつぶっていると）、（エネルギーが）来るんです。だから今でもこれから踊りきれんかっていう不安はありますが、命の続く限り、もちろん体を大事にして、踊って行きたいなあとと思っています。

鵜飼：今年もまた、夏は北海道を回られるそうですね。

ギリヤーク：はい。北海道は、土日に踊るんですよ。で、今日踊って、明日も踊れるのかなあって。今回はこっち（関西公演）は、（間に）2日くらい休んでるからね。その不安ってのはまだあるんです。でも思い切って、いつもですと演目も、今年はこっちで、ピエロの踊り（「夢」）とね、「白鳥の湖」カットしたんですよ。あれはあれで、見た目は軽やかだけど、ものすごく息の切れる難しい踊りで。だから北海道も、ここと同じように「じょんがら一代」、「よされ節」、「念仏じょんがら」。この3つで。それにしても2日間、まだ1カ月あるから、北海道公演は7月の1日からですから、それまで体調を見て、スケジュール組んで頑張っていこうと。それにしても、あれですね。エライところでやることになりましたね。舞台ってのは、やりづらいですね（会場笑い）。見当つかないですね。

鵜飼：わかりました（笑）。それから10月には、東京の新宿でも。

ギリヤーク：その場合は1時間半くらいある。「じょんがら」3つあるんですよ。今日やるのは「じょんがら一代」。で、最後の「念仏じょんがら」。その間に、「ねはんじょんがら」ってある。「じょんがら3部作」になってるんです。これはわりと顔の表情が多いんですけどね、また特徴がある。そのほかも、フンドシ1本で踊ったりね、「念力」というの。

それから、今日本当は踊りたかったかなあ



図21 「うかれおわら」（撮影：島橋亮）

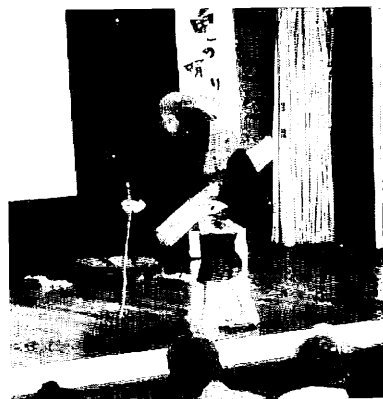
って思ったけど、京都の出雲の阿国さんから題材を取った、「うかれおわら」っていうのがあるんですよ。これは、400年以上前にね、京都の四条河原で踊った阿国さんのために。歌舞伎の創始者、元祖といわれているけれど、私から見ると、大道芸の大先輩。400年以上前に、青空舞踊公演をやった人ですからね。尊敬している。京都に来て銅像を見ているうちに、何とか阿国さんのために1曲作りたくなあってね、作ったのが「うかれおわら」なんですよ。今回衣装持ってきてませんでしたけど、来年はね、円山公園で。それからあの、映像としてもね、そのシーンは面白いですよ。ものすごくいいシーンで。また、機会があると思いますので、それもやりたいですね。

鵜飼：私も、毎年春に、京都でギリヤークさんにお会いできることを楽しみにしています。今日お越しのお客さんも、みなさんきっとそうだと思います。まだまだお伺いしたいこともありますけど、これから踊りも見せてくださることになっておりますので、第2部は、このあたりで終りにしたいと思います。ギリヤークさん、ありがとうございました。

ギリヤーク：街頭と同じように踊りますから。

<拍手>

第3部<「じょんがら一代」「よされ節」「念仏じょんがら」実演>



<拍手>

ギリヤーク：どうもありがとうございました。

私は今日は5人くらい来ていただければ、ありがたいなあと思っていたんです。そうしたら鶴飼先生のはうは「いや、もっとたくさん来るんだ」と言っていたので、こんなに本当にいっぱい来てみると、ここ蒸し風呂のように暑いです。だいたい8月の真夏の感じです。暑いのはどっちかという弱いんですけど、でも今日はみなさんの熱気をたくさんいただいて、精一杯精魂込めて踊りました。体のほうも、休む時は休んで、そして踊る時は一生懸命踊るようにして行って、今度50周年っていうと、88歳ですけど、本当は来年と言って来年倒れたら嫌だなあと、やっぱり目標は高く持って、今度は50周年公演目指して頑張ります。どうも皆さんありがとうございました。

鶴飼：ありがとうございました（会場拍手）。

ギリヤーク：今日は皆さんのエネルギーをいただきました。エネルギーが渦巻いてこっちに来ていました。こういう舞台だから、こんなにできたんだと思います。本当の街頭だったらそんな余裕なく、夢中にやっていたんでしょうけど、また一つ勉強になりました。本当に今日、精一杯頑張りました。どうもありがとうございました。

鶴飼：ギリヤークさん、本当にありがとうございました。また、本日も越しになったみなさ

さんも、ありがとうございました。ギリヤークさんにお伝えしたいメッセージや言葉などは、アンケートの方にもぜひお書きください。今日はどうもありがとうございました。

（了）

- 1 ギリヤーク尼ヶ崎『鬼の踊り：大道芸人の記録』ブロンズ社、1980
- 2 『鬼の踊り』によると、屋号は紅屋といい、「父の作るお菓子はよく売れた。また、従業員も大勢いて、“紅屋”と言えは菓子製造元として函館では名が通っていた」[p43]という。
- 3 函館市立中学。現在の市立函館高校。
- 4 第1回国民体育大会は、1946（昭和21）年11月、京都府、大阪府、兵庫県を中心に開催された。
- 5 「日本一キレイな女優さん」の話は、シンポジウム会場ではここでとぎれてしまったが、戦前・戦後の日本映画を代表する女優、原節子のことである。
- 6 『鬼の踊り』によれば、ギリヤークさんが函館の実家を出たのは1951年12月のこと。
- 7 1951年当時で、東京の公立小学校教員の初任給が5500円であり、毎月2万円の仕送りというのは、相当な額であった。それだけ実家が裕福だったのだろう。
- 8 長嶋茂雄の読売巨人軍入団は1958年。
- 9 この話は、内容が前後しているので、『鬼の踊り』をもとに、以下に補足する。ギリヤークさんは1951年12月に上京し、舞台芸術学院や新演技座研究所などをへて、1953年9月に邦正美舞踊研究所に入った。その後、1955年に函館の実家の菓子屋が倒産し、父は大館に移って製菓業を継続する。ギリヤークさんは、1956年末ごろに東京のアパートを引き払い、いったん函館に戻った。大館に行

- くのは、1957年春のことである。そして、父や妹の死を看取った後、1960年に再上京する [pp.43-48]。
- 10 邦正美（1908～2007）。舞踊家。本名江原正美。東京帝国大学卒業後、ドイツ国立舞踊大学に学び、戦後帰国。邦正美舞踊研究所を開設する。著書に『舞踊の文化史』『舞踊の美学』など。
 - 11 『鬼の踊り』によれば、ギリヤークさんは1957年7月に日本青年館で行われた全日本芸術舞踊家協会主催の第2回全国合同公演で舞踊界にデビューした。その踊りは、同年7月30日付の『デイリースポーツ』芸能欄に「地方の作品に収穫」という見出しで批評された [p45]。
 - 12 近藤正臣との交流はその後も続き、ギリヤークさんは大道芸を演じるさい、近藤正臣から贈られた幟を立てるのを恒例としている。
 - 13 美濃部亮吉（1904～1984）。都知事在任は1967年から1979年の3期、12年間。1970年8月2日、銀座、新宿、池袋、浅草で歩行者天国を実施した。
 - 14 1969年から71年までTBS系列で放映されたテレビドラマ。主人公の一条直也を演じたのが桜木健一で、近藤正臣はライバルの結城真吾を演じた。近藤がピアノの上に乗って足で「猫ふんじやった」を演奏するシーンが有名。
 - 15 蜷川虎三（1897～1981）。京都大学経済学部教授、中小企業庁長官を経て、1950年から7期28年間、京都府知事。ただし、蜷川が三条大橋周辺を「ここは大道芸の場所」と決めていた事実はないようだ。
 - 16 高山彦九郎（1747～1793）。江戸時代の尊皇思想家。三条大橋東詰に、御所を跪拝している銅像があり、待ち合わせ場所としても有名。
 - 17 前身は1948年に結成された日本芸術舞踊協会。1956年に全国的組織として改組され、全日本芸術舞踊家協会となった。その後、社団法人化にともない、1972年に現代舞踊協会となった。
 - 18 新潟県西蒲原郡月潟村（現・新潟市南区月潟）を本拠地に、全国を旅して演じられた獅子舞。越後獅子ともいわれ、大道や門付けで、子どもが逆立ちやとんぼ返りなどのアクロバットを演じた。明治末に廃れ、昭和8（1933）年に公布された児童虐待防止法によって終焉を迎えたとされているが、ギリヤークさんの証言によれば、昭和10（1935）年前後まで、函館で演じられていたことがわかる。
 - 19 「青森の津軽三味線の名人」とは、白川軍八郎（1909～1962）のこと。津軽三味線の始祖である神原の仁太坊の最後の弟子で、その曲弾きが津軽三味線という呼称を生み、「津軽三味線の神様」とまで称された。戦後の歌謡曲黄金時代を代表する流行歌手・三橋美智也の津軽三味線の師匠でもある。
 - 20 ギリヤークさんが大道芸を演じるさいに使用する掛け軸状の看板には、「大道芸人 青空舞踊公演 公演時間十五分」と書かれている。
 - 21 サハリン島中部以北およびアムール川下流域に住む先住民。第2次世界大戦後、南サハリンに住んでいた一部が、北海道に移住した。現在は、自称であるニヴフ（複数形はニブヒ）の名で呼ばれることが普通。
 - 22 『鬼の踊り』によれば、1972年7月、新宿の花園神社で開かれた新宿祭りの最終日に、「私は初めて津軽じょんがら節の曲をバックに、即興で踊った。身にぼろをまとい、地べたに敷いたゴザの上に座って目を瞑り、ほとんど顔の表情だけで踊った」 [p65] という。
 - 23 1995年の阪神・淡路大震災とその後起きた火災のため、壊滅した神戸市長田区菅原通の市場。本シンポジウム後のことになるが、2010年1月17日にギリヤークさんが菅原市場で踊った様子は、『週刊女性』（2010年2月23日号）に栗津仁雄が書いている。
 - 24 林武（1896～1975）。東京芸術大学教授をつとめた洋画家。1967年、文化勲章受章。
 - 25 1987年5月に起きた朝日新聞阪神支局襲撃事件で、犠牲者になった小尻知博記者。
 - 26 2005年4月に起きた、JR西日本福知山線の列車脱線事故。